REITAKU JOURNAL

ゆっくり読みたいスクールカルチャーマガジン

2020 vol 14

私たちがつくる持続可能な世界 …… 01
誰一人取り残さない社会を実現するために大切なこと～ASPIRE REITAKUの取り組み～ …… 07
ネパールを舞台に活動を続ける学生団体「Be a Bridge!」は、衛生環境啓発で国際協力を果たす …… 09
目指す先は世界で活躍する日本人 世界中の大学生が各国を代表して参加する模擬国連団体の活動 …… 11
私たち、週３回、小学校で英語の先生をしています！～子どもたちの笑顔の先にあるもの～ …… 13

小規模にこだわる。

国際性にこだわる。

麗澤大学

Reitaku University

私たちがつくる 持続可能な世界

「SDGs」というキーワードをよく耳にするようになりました。
とは言え、「どんなことをしたらいいのかわからない」「何か自分も挑戦してみたい」
そんな思いを持っている方も多いのではないでしょうか？
そんな皆さんに麗澤大学での取り組みの一部をご紹介します。
本ガイドブックでは３つの項目に分けて構成されています。

STEP1 SDGsとはどんなものなのか

世界が抱える問題やその取り組みについて、活動が活発な３つのテーマについてご紹介。改めてSDGsとは何か考えます。

STEP2 麗澤大学が取り組むSDGs一覧

「SDGs」という言葉をよく耳にする前から、麗澤大学ではさまざまな活動を実施してきました。SDGsについてよくわかったところで、「自分なら何がしたいか」「自分ならどんなことができるか」一覧から探してみましょう。

STEP3 実際の取り組みを詳しくご紹介

ここでは一部の活動団体にフォーカスし、実際にどんな思いで、どんな取り組みをしているのかご紹介します。様々な思いで学生が主体的に活動しています。

今から10年後、2030年 ――
社会を担う世代となるみなさんへのミッションとは…？

５歳まで生きることができない子どもたち、終わりの見えない戦争、頻発するテロ…。
日本に住んでいるとあまり気にかけたことがないかもしれませんが、今、世界で実際に起きていることなのです。
また、地球温暖化などの気候変動などはもはや他人事では済まされない問題になっています。
これらの課題を世界がひとつとなり解決するため、2015年に国際連合は、2030年までに達成すべき具体的な目標を立てました。

「持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals：SDGs）」
（サステイナブル ディベロップメント ゴールズ）（エスディー ジーズ）

そもそもSDGsとは？

- 2015年に国際連合で採択された「2030年までの達成をめざす17の目標」
- 国際機関、政府、企業、学術機関、市民社会、子どもも含めた全ての人が、それぞれの立場から目標達成のために行動することが求められている
- キーワードは「誰一人取り残さない」

【17の目標の中でも特に活動が活発な3つのテーマについて、ご紹介します。】

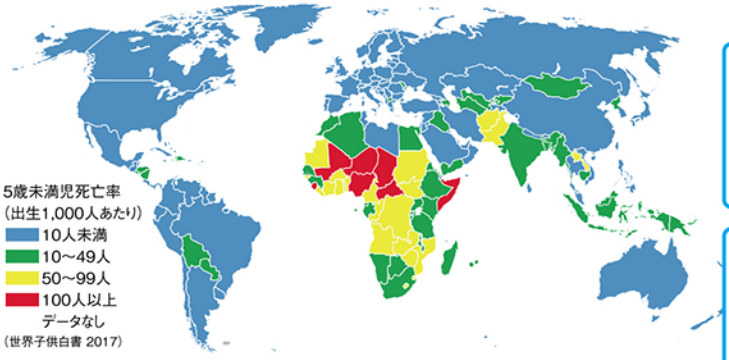
01 不平等をなくす！

対象となる項目：

＼5歳まで生きられない子どもが多い国／

世界のどこかで約6秒に1人のスピードで幼い命が失われているのをご存じですか？5歳になるまでの間に年間540万人の子どもが亡くなっているのです。※1

「貧乏だから」「女だから」など理不尽な理由で、小学校に通えない児童が6,300万人もいるのです。※2



安全な水が供給されていない人は世界に22億人います。そのうち1億4,400万人は河川や用水路、池などの水をそのまま使っているのです。※4

衛生的に排泄物処理ができるトイレが家にない人は世界で42億人います。そのうち6億7,300万人は屋外で用を足しているのです。※5

極度の貧困状態※で暮らしている人は世界に7億6,700万人います。そのうち3億8,500万人は子どもなのです。またその多くは南アジアとサハラ以南で起こっているのです。※3
※国際基準で定められた1日1.9米ドル未満の生活

＼開発途上国の多くの母子が直面している問題／

＜産前・産後のケアの欠如＞

妊娠・出産中の合併症が原因で死亡する女性は年間約30万3,000人（1日約830人）※6いると言われています。

＜栄養失調＞

1億4,900万人の5歳未満の子どもは日常的に栄養不足です。これは世界の5歳未満児の21.9%にあたります。※7　この時期に十分な栄養がとれないと、身体の発育のみならず、知能の発達にも影響を及ぼすこととなり、子どもの人生に大きく関わってくることになります。

Special Column

世界の母子を守るための大事な記録「母子健康手帳」

日本発祥

日本では当たり前のように活用されている「母子健康手帳」。妊娠から赤ちゃんが6歳になるまで、母子の健康記録を残すための大事な手帳です。予防接種や健診、成長記録が一冊でわかるようになっており、何かあった場合にもこの記録をみればすぐわかり、対処することができます。
日本は乳幼児死亡率が世界で一番低い国のひとつと言われています。それはこの「母子健康手帳」が一役買っているのです。
日本では政府開発援助（ODA）を活用し、アジア・アフリカ諸国でこの「母子健康手帳」を広める国際協力を推進しています。保健の知識を向上させ、母子の健康状態を改善することが目的です。どの国に生まれるか、子どもは選ぶことはできません。どこで生まれることになっても命の制約を受けることのないようにと、取り組まれている活動のひとつです。

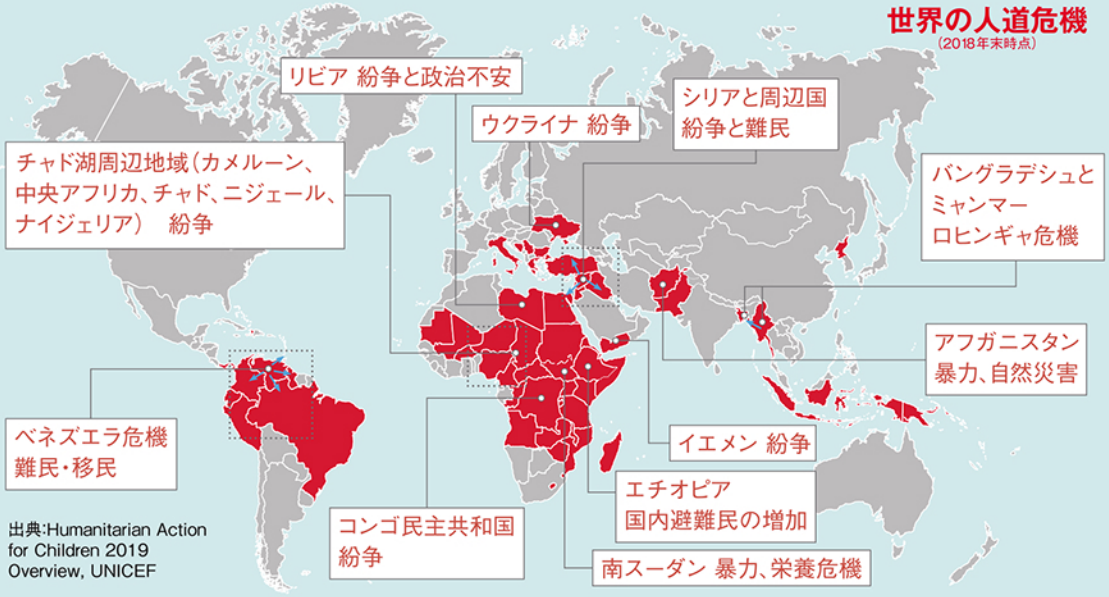
※1 Levels and Trends in Child Mortality 2018, UNICEF
※2 One in Every Five Children, Adolescents and Youth is Out of School, UNESCO 他，2018　※3 Ending Extreme Poverty: A Focus on Children, UNICEF, 2016　※4,5 Progress on Drinking Water, Sanitation and Hygiene: 2000 - 2017 : Special focus on inequalities, UNICEF, WHO　※6 Maternal Mortality, WHO（2018年2月）※7 Joint Child malnutrition estimates - levels and trends-2019 edition, UNICEF, WHO, The World Bank

02 暴力や差別をなくす！

対象となる項目：

＼世界の紛争とその中にいる子どもたち／

紛争中の国に生まれ育つ子どもたちは、健康を脅かされ、教育を受ける機会も奪われてしまいます。それどころか戦闘要員やスパイ、メッセンジャー役など重要な任務を任されるなど、紛争に巻き込まれている子どもも、世界には数万人いると推定されています。
紛争下に暮らす子どもの約2,700万人が学校には通えていません。※1



出典:Humanitarian Action for Children 2019 Overview, UNICEF

子どもへの虐待

日本でも子どもへの虐待に関する痛ましい事件が報道されることがあります。ある調査では２～４歳児の約４分の３が家庭内で身体的・精神的虐待を受けているという結果が出ています。※4

子どもたちの結婚

15歳未満での妊娠・出産は教育のチャンスを奪われるだけでなく、身体的なリスクが非常に高くなります。世界には15歳未満で結婚した女性が２億5,000万人いると言われています。※3

子どもたちの労働

子どものうちから働かされることにより、十分な教育が受けられず、大人になっても貧困のまま…という悪循環がうまれています。世界の子どもたちの１億5,200万人が働かされていると言われています。※2

差別

差別には性別、宗教、障がい、民族…など様々です。これらの差別をなくすために、様々な法律や条例などがつくられるなど、取り組みが進められています。子どもの権利条約ではどんな理由であれ、子どもは差別されないことが定められています。

いじめ・事件

ある調査では13～15歳の子どものうち、約３人に１人はいじめを経験したことがあるという結果が出ています。※4 また最近では、ＳＮＳなどの普及によりインターネット上でもいじめが多発しています。差別的な書き込みや無視など、その方法は様々です。
またインターネット上で犯罪に巻き込まれるケースも少なくありません。日本では年間で1,500人以上の子どもがＳＮＳを通じて事件に巻き込まれています。※5

Special Column

難民家庭の少女が、自ら親を説得し、教育の重要性を訴える

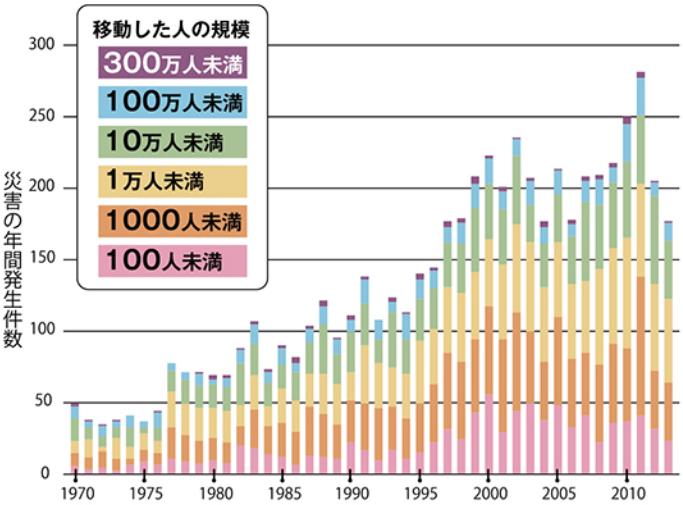
2013年にシリアから家族でヨルダンに逃れていたマズーン・メレハンさんは「教育が何よりも大事」と、国を出るときの持ち物は教科書のみだったそうです。マズーンさんは難民キャンプで暮らしていましたが、キャンプ内のテントを渡り歩き、子どもが学校教育を受けられるように親たちを説得し続けました。2017年には19歳という最も若いユニセフ親善大使に任命され、子どもの教育（特に女子の教育）の重要性を訴え続けています。

※1 Education Uprooted, 2017, UNICEF　※2 Global Estimates of Child Labour：RESULTS AND TRENDS, 2012-2016, ILO, 2017　※3 Ending Child Marriage: Progress and prospects, 2014, UNICEF　※4 A Familiar Face: Violence in the lives of children and adolescents, 2017, UNICEF（それぞれ94カ国と149カ国のデータ。どちらも日本は含まれていません。）　※5　警察庁「令和元年における少年非行、児童虐待及び子供の性被害の状況」

03 地球環境を守る！

対象となる項目：

住民の移動を余儀なくさせる災害の年間発生件数（1970～2013）



グラフ：Unless we act now: The impact of climate change on children, UNICEF, The Internal Displacement Monitoring Centre (IDMC), Disaster-related displacement risk: measuring the risk and addressing its drivers, 2015

頻発する干ばつ、砂漠化、スーパー台風、豪雨など、増加している災害は、やむなく移動を強いられる人、食糧危機にさらされる人が増える原因にもなっています。

水不足

人口増加、水力発電、生活用水への水需要の増加、気候変動に伴い、深刻な水不足が起きています。水資源の奪い合いが紛争をもたらすことも…。

地球温暖化

大気中の温室効果ガスは今も増え続けています。温暖化により感染症を引き起こす生物の生息地は広がり、蔓延する可能性もあるのです。たとえば蚊はあたたかい場所を好みます。マラリアやデング熱、ジカ熱などは蚊を媒介する感染症ですので、これらの感染症が蔓延する可能性は十分にあるのです。

また日本にもある「原子力発電」には温室効果ガスを排出しない利点がありますが、その一方で放射性廃棄物の処分という別の課題があります。そんな中、二酸化炭素など温室効果ガスを削減するために「パリ協定」が策定されました。日本もこの協定に参加しており、政府は太陽光などの再生可能エネルギーの利用を促進し、企業を中心に省エネ技術や環境保護技術の開発を進めています。エネルギー資源の量を減らすことを意識し、環境への負荷を少しでも少なくするために積極的に取り組んでおり、SDGs達成を掲げる企業も増えてきています。

世界で役立つBOSAI（防災）とは

自然災害からの被害をできるだけ減らすためには、事前の備えが重要です。そして起こってしまった後はそこからいかに早く復興できるかも大切です。

長年、防災に取り組んでいる日本は「経験」と様々な「技術」、「仕組み」があります。これらを自国だけに留めず、世界の自然災害被害の減少に役立てるため、日本ではこれまでに3回、国連防災世界会議を開催するなど、多くの貢献をしてきました。

福島では子ども達が生きる力を学ぶ場として「ふるさと復興会議」を開くなど、積極的に活動を広げています。

パーム油の話

普段から口にすることの多いお菓子や加工食品に含まれているのが「植物油脂」。洗剤にもこの植物油脂が含まれていますが、これはアブラヤシから採れるパーム油です。何にでも使えるこの便利な油を生産するために、広大な熱帯雨林が伐採されています。アブラヤシ栽培に適している赤道下の熱帯雨林には、ゾウやオランウータンをはじめとする多種多様な動植物が生きています。動植物はアブラヤシのプランテーションのために生きる場所を奪われています。

海について

地球の表面の70%を占めるのが海です。津波や台風など大規模災害をもたらすこともありますが、私たちの生活に欠かせない食物である海産物を供給してくれるのも海です。また、生態系や海水温が気候の安定に大きな役割を果たしています。

近年、大量のごみ、汚染物質が海へ流出したことで海洋の酸性化やサンゴ礁やマングローブ林の減少、海水温の上昇など危機的な問題に直面しています。

【麗澤大学SDGs活動一覧】

	内容
	ミクロネシア連邦が直面する課題（廃棄物処理、雇用の創出等）を解決するため、現地小学校での啓発活動や新たな雇用創出のためのタイヤサンダルプロジェクト等を実施しています。
	ネパール大震災をきっかけに、2015年から減災教育をテーマに現地の小中学校を対象として活動をスタート。現在は衛生環境啓発へと活動内容を発展させています。 詳細はP9
	カンボジアの小学校で初等教育充実のために活動をスタート。実際には校庭の塀建設を実施したり、全校運動会の開催や理科実験・交通安全に関する出前授業を実施するなど幅広く活動しています。現在はフィリピンにも拠点を広げ、活動しています。
	国連と各国の高等教育機関を結ぶプログラム「国連アカデミック・インパクト」における学生組織。ASPIRE JAPANとASPIRE KOREAの友好関係を結ぶ、Goodwillイベントを開催したり参加したりするなど、世界を舞台に活動しています。 詳細はP7
	タイ国チェンライを拠点として、山岳少数民族に対する教育支援活動、子どもたちと交流するなどの活動を実施。山岳少数民族の民芸品を販売し、教育・国籍など現地が抱える問題を伝え、支援金を届けています。
	一国の大使・代表となって様々な国際問題について考える、大学単位で参加する活動。日頃の活動を披露する場が、毎年、アメリカの主要都市で開催される「全米模擬国連大会」。本団体は、2011年から毎年11月にアメリカ・ワシントンD.C.で開催される全米模擬国連大会に連続出場しています。 詳細はP11
	小学校での英語授業支援ボランティア活動。本学と同じ地元である柏市の小学校で週３回、朝の時間を活用し英語を学ぶ楽しさを教えています。 詳細はP13
	教職課程履修学生有志が集まり、松戸市の小学校で英語授業を行っています。将来、先生を志望する学生にとっても、英語を学びたい児童にとってもプラスになる活動となっています。
	教職課程履修者有志が集まり、近隣中学生を対象に英語に対する苦手意識の克服や学力向上を目標に、工夫を凝らした授業を展開しています。
	日本語母語者がいない環境で学ぶ学習者の対話練習やスピーチのサポートに加え、スピーチコンテストの審査員や、日本からスカイプを用いて、日本語支援を行うなど、幅広く活動しています。
	大学祭でのごみの分別は「15分別」としたり、飲食後の汚れたトレーはフィルムを剥がして可燃物と資源に分別するなど、リサイクル活動を徹底しています。来場者にもエコ活動に参加してもらえるよう工夫して活動を続けています。
	連携協定を結んでいる柏市・柏商工会議所の協力を得て、地方自治体や企業が抱える課題についてヒアリングを実施し、ディスカッションを重ね、実際に解決策を提案するPBL（Project Based Learning：課題発見解決型学習）を取り入れています。
	2016年より柏市にある革細工専門店のNUIZA縫EMON（ぬいざえもん）にご協力いただき、学生視点で商品開発や経営学科の視点で集客をサポートするなど活動しています。現在は商品開発から販売まで携わるなど活動の幅を広げています。
	公民学連携組織の「一般社団法人柏アーバンデザインセンター（UDC2）」と連携。学生が積極的に柏駅周辺のまちづくりのプログラムに参加し、UDC2の助成制度を活用して独自の企画を展開するなど、活動の広がりを見せています。
	柏レイソルファン感謝デーの企画、グッズ開発などを学生が企画し提案。柏レイソルでのインターンシップを通じて、スポーツビジネスの本質を学び、地域の活性化に貢献しています。
	「観光地・石垣島の実態を理解し、観光について考える」というテーマでインターンシップを行っています。宿泊施設での業務の他、地元住民から話を聞くなどの調査を行い、石垣島をより魅力的にするお手伝いをしています。
	本学の学生が中心となり発足した若者主体の町おこしプロジェクト。松崎町をよりよくしたい若者が各地から集まって活動しています。
	海外から来日した留学生が本学で充実した留学生活を送るため、学生が留学生とペアまたは３人１組になり、日常生活をサポートする制度です。
	様々な価値観、経験をもつ人が「本」（語り手）となり「読者」（聞き手）と１対１～３で対話をするイベント。異文化を学び、私たちを取り巻く社会を包括的に考えるために、地域、国内、世界で活躍する方々を本役として招き、彼らとの対話から新しい自己の発見や生きるヒントを得ています。
	これからのアクティブ・シニアライフに欠かせない３領域「文化・教養の森」・「ことばの森」・「健康の森」について学びを深めます。「文化・教養の森」は、歴史・思想・宗教・芸術から、政治・経済・国際関係まで、幅広く学びます。「ことばの森」では、英語・ドイツ語・フランス語・イタリア語・中国語・韓国語の６ヶ国語を網羅し、初級から上級まで幅広くコースを設け、学びを深めます。そして「健康の森」では、「からだの健康」と「こころの健康」を、実践を通して学んでいきます。
	市内４大学図書館と柏市立図書館とで毎年意見交換会を開催し、大学図書館の「市民への開放」を目的とした合同企画展・講演会等を開催しています。2012年からは、新たに、大学生を中心とした若年層への読書支援を目的とした「ビブリオバトル」を開催しています。
	学生相談室では大学生活への適応やこころの成長を促す機会を提供しています。臨床心理士によるカウンセリングや心理検査、精神科医による健康相談、自分や他者理解につながるセミナーやワークショップなどを行っています。そして安心してくつろげる学生の居場所も提供しています。
	本学で学ぶ障がいのある学生が、学生生活を送るにあたって生じる社会的障壁に対して改善を希望する場合、関連する組織や機関と連携し、本学と学生双方の建設的対話による相互理解を通じて、「合理的配慮」に基づく支援を可能な限り行っています。
	１度の留学で、主専攻言語と第二外国語を同時に学べる本学オリジナルの留学プログラム。ドイツはイェーナ大学、台湾は淡江大学、韓国は釜山外国語大学にて実施しています。
	北海道にある枝幸町の魅力を学生が再発見することで、観光資源の見直しをし、より魅力的な枝幸町になれるよう情報発信しています。

麗澤大学でも様々な活動を実施しています

活動名／団体名	発足年／活動開始	活動場所（国など）	目標
Japanesia（教育支援）	2013年～	ミクロネシア（ポンペイ島）	4 8 11 12 14 17
Be a Bridge!（教育支援）	2014年～	ネパール	3 4 12
国際協力団体 PLAS＋（教育支援）	2014年～	カンボジア、フィリピン	3 4
ASPIRE REITAKU （ASPIRE JAPANの下部組織）	2013年～	日本、韓国、台湾など	4 17
プアン（教育支援）	2000年～	タイ	1 3 4 10 12
麗澤模擬国連団体	2011年～	アメリカ	4
小学校英語授業支援ボランティア （酒井根東小学校英語教育支援）	2017年～	日本・千葉県（柏市）	4
小学校英語授業支援ボランティア （栗ケ沢小学校英語教育支援）	2014年～	日本・千葉県（松戸市）	4
英語学習支援プログラム	2015年～	日本・千葉県（柏市）	4
インドネシア日本語会話ボランティアプログラム	2017年～	インドネシア	4
麗陵祭実行委員会（リサイクル活動）	1990年代～	日本・千葉県（柏市）	12
麗澤・地域連携実習	2017年～	日本・千葉県（柏市）	11
地元企業との産学連携	2016年～	日本・千葉県（柏市）	4
柏アーバンデザインセンター（UDC2）との産学連携	2017年～	日本・千葉県（柏市）	11 12 17
地元スポーツチームとの教育連携	2017年～	日本・千葉県（柏市）	4
地域との包括的連携	2017年～	日本・沖縄県（石垣島）	4 8 11 14 17
松崎未来デザイン会議（町おこしプロジェクト）	2019年～	日本・静岡県（松崎町）	8
Conversation Partnership	2018年～	日本・千葉県（柏市）	4
ヒューマンライブラリー	2015年～	日本・千葉県（柏市）	4
オープンカレッジ	1983年～	日本・千葉県（柏市）	3 4 11
図書館の取り組み	2008年～	日本・千葉県（柏市）	4 11 17
学生相談室のメンタルヘルスサポート	1985年～	日本・千葉県（柏市）	3
障がい学生支援	2018年～	日本・千葉県（柏市）	4 10
クロス留学	2007年～	ドイツ、台湾、韓国	4
地域との交流促進事業	2018年～	日本・北海道（枝幸町）	4 11 14 15 17

Interview

楊 邵予 外国語学部 国際交流・国際協力専攻

中国の天津市出身。１年次から「ASPIRE Reitaku」、ネパール教育支援団体「Be a Bridge!」に所属。オフは大好きな韓国ドラマを見て過ごす。将来は海外に暮らし、現地と日本の懸け橋となる仕事をするのが夢。

君和田 理子 外国語学部 国際交流・国際協力専攻

千葉県出身。友人の楊さんの誘いで２年次の６月から「ASPIRE Reitaku」に所属。趣味はボルダリングとプロ野球観戦。将来は地方公務員として、SDGｓ（持続可能な開発目標）の理念である「誰一人取り残さない」社会を日本で実現することが目標。

前編

＼そこにある小さな差異に気づけるか？／

誰一人取り残さない社会を実現するために大切なこと ～ASPIRE REITAKUの取り組み～

ボランティアをはじめとする、様々な学生団体の活動が盛んな麗澤大学。その中から今回は、現在９名の学生が参加する「ASPIRE REITAKU」の取り組みをご紹介します。

「ASPIRE」とは、国内外の様々な大学に設置される学生団体です。国連と世界の大学を結ぶ「国連アカデミック・インパクト（UNAI）」のプロジェクトのひとつとして２０１０年から始まり、ASPIRE REITAKUは２０１３年に設立されました。国際舞台では、大学の枠を超えてASPIRE JAPANとして活動します。では早速、メンバーの楊さん、君和田さんにお話を伺ってみましょう！

日韓の学生がＳＤＧｓをテーマに英語でプレゼンテーション、ディスカッション！

―活動内容を教えてください

楊：学生が主体となって、ＳＤＧｓ（国連が採択した２０１５年から２０３０年までの国際目標）をテーマに、多種多様な学習活動を行っています。たとえば、年間最大のイベントとして、ASPIRE JAPANと韓国の大学から成るASPIRE KOREAとの協働プロジェクトGoodwill Session（グッドウィルセッション）があります。毎年夏冬にお互いの国を行き来し、２０１９年の夏は韓国ソウルの慶熙（キョンヒ）大学で開催され、日本からは本学と桜美林大学の２校、韓国からは７校が参加しました。その内容は、ＳＤＧｓをテーマに、日韓共通の問題について２日間かけてプレゼンテーション、ディスカッションをし、解決策を考えるというもの。今回、麗澤大学は持続可能なエネルギーをテーマに、日本の原子力発電事情についてプレゼンテーションを行いました。一連の取り組みを通して、知っているようで知らないお互いの国の現状を知ることができ、意見を交わし合うことで、より良い答えを導き出すことができます。これら全てを英語で行うのですが、まだまだ英語に苦手意識のある私は、翻訳機に頼ったり、ジェスチャーを駆使しながら頑張っています。

―活動の楽しみはどんなところにありますか？

楊：たとえばグッドウィルセッションでは、韓国の学生との交流も楽しみのひとつ。韓国と日本は今、とてもデリケートな関係にありますが、実際に韓国の学生の皆さんと交流すると、報道が伝えるような反日感情を感じることはありません。それどころか訪韓の際には、他校よりも早く着いた私たちをわざわざ空港まで出迎え、観光もセッ

ティングしてくれるなど、心から歓迎してくれました。セッションを重ねるごとに「また会えたね！」「また次も会いましょう！」と交流が深まっていくのも嬉しいです。

「そんな考え方があるんだ！」「そんな意見を持っていたの!?」ディスカッションは新発見の宝庫

――活動を通して、どんな発見や学びがあるのでしょうか？

楊：ディスカッションの場では、海外の学生に限らず、日本の学生同士でも「えっ、そんなこと考えていたの!?」と驚くことがよくあります。いつもは明るく冗談ばかり言い合っている仲間が、ディスカッションになるときちんと自分の意見を持って堂々と発言していて、新たな一面を見ることができます。相手の考えや、自分が思いもつかない発想を知ることができ、私自身の思考も深くて広いものになったと思います。

君和田：私は、相手との間にある、小さいけれども歴然とした差異に気づくことの大切さを学びました。昨年、ASPIRE REITAKUと交流がある台湾の大学で開催されたセッションに参加した時のこと。セッションテーマは「日台関係」で、歴史的な施設の見学など、日台の歴史を学ぶスタディツアーを一日かけて行いました。その日の夜に、急遽、今後の日台関係のあるべき姿について、日本チーム、台湾チームがそれぞれプレゼンテーションをすることになりました。その時に痛感したのは、日本人学生と台湾人学生の歴史認識の大きな違い。そもそも、台湾の学生は日本統治時代の歴史について当たり前のように詳細まで知っているのに対し、私たち日本人学生はほとんど何も知りませんでした。それはどちらの学生が優秀とかという話ではなく、統治した側と、された側の違い。歴史認識が違えば、未来の日台関係に対する考え方も異なります。私たちはたとえば、先進国である日本と、アフリカの途上国の間にギャップがあることはすぐ理解できます。けれども、日本と台湾のように、地理的に近く、外見や文化も似通っていて、なおかつ友好関係にある国同士にも、実は差異があり、それが両国を大きく隔てていることには、なかなか気づくことができません。その差異と向き合えた時に初めて、揺るぎない日台関係を築くことができるはず。そして小さな差異を見過ごさないことが、私たちが今抱える様々な問題の解決、SDGsが目指す「誰一人取り残さない」社会の実現につながるのではないかなと思います。

メンバーが「いいね！」と思えることなら何でもできる。私たちと一緒に新しいことに挑戦しましょう！

――ASPIRE REITAKUの今後について教えてください

君和田：これまではASPIRE JAPANとしての活動がメインでしたが、今後はASPIRE REITAKU独自の活動も積極的にトライしていこう！とメンバーと話しているところです。SDGs普及のため、学内でSDGsのワークショップも開催したいと思っています。実際、2019年秋の麗陵祭（大学祭）では、初出店をし、ピンクのポップコーンを販売しながら、乳がん予防の「ピンクリボン運動」を広める活動を実施しました。ASPIRE REITAKUはSDGsに限らず、メンバーが「いいね！」と思えることなら、何でも挑戦できる環境です。どんな企画も大歓迎！　麗澤大学に入学したら、私たちと一緒に新しいことにチャレンジしていきましょう！

＼Check!／
後編はWEBでご覧いただけます。

Interview

田口 麻希 外国語学部 国際交流・国際協力専攻

1999年生まれ。埼玉県出身。小・中・高とバスケットボール部に所属。趣味はミュージカル映画の鑑賞とアクセサリー収集。将来の自分への投資としてフィリピンやネパールでインターンシップをするなどスキルアップを図っている。

藤内 麻菜華 外国語学部 国際交流・国際協力専攻

2000年生まれ。東京都出身。小・中学校時代は水泳、高校では弓道に夢中になったというスポーツウーマン。現在も気が向けば道場へと足を運び無心で弓を引くという。趣味は好きなジャンルの音楽鑑賞。

前編

ネパールを舞台に活動を続ける学生団体「Be a Bridge!」は、衛生環境啓発で国際協力を果たす

麗澤大学には数多くの学生団体が存在していますが、ここではネパールのカトマンズを拠点として精力的な国際交流を続ける自主企画ゼミナール※「Be a Bridge!」（ネパール教育支援団体）に注目してみたいと思います。今回は同団体の主軸メンバーである田口麻希さんと藤内麻菜華さんに活動内容とその魅力についてお話を伺いました。

※自主企画ゼミナール…自身の学びたいテーマに基づき、学生が自ら指導を受ける教員を選び、何をどのように学習していくかについて、該当教員の助言を受けながら決定し、学習計画を立て、その計画に従って学習を進めていく学生イニシアティブの科目。

自分たちにできることを考え、衛生環境啓発で子どもたちの健康を守る

19名の学生が所属し、活動を続けるBe a Bridge!。ネパールの首都であるカトマンズの小中高一貫校の児童・生徒を対象に、子どもたちだけでなく地元の先生方と共にニーズを共有し、学生団体としてできることを探しながら活動を続けています。そして、活動の基軸として導き出した答えが「衛生環境啓発」。カトマンズは首都でありながらもインフラの整備が整っていない地域も多く、子どもたちにとって衛生環境啓発は、健康を守る上でも大きな意味を持っているのです。渡航の時期は春と夏の年2回、各10日間ほどカトマンズの地で活動を行っています。

「Be a Bridge!という団体は、2014年にスタートしました。最初は秋田の小さな集落での雪かきボランティアから始まった活動でしたが、2015年に起きたネパールの大震災をきっかけに、活動拠点を国内から海外へと移したのです。最初の現地調査で、地震に対する知識が乏しかったことが被害拡大につながったということを知り、地震が多い日本に住んでいる私たちだからこそ伝えられる対処方法があると感じました。それをネパールの地域性を加味し、アレンジして現地の子どもたちに教えることから始めたのです。この団体名は“Bridge”が示す通り『懸け橋』という意味が込められており、今はネパールと日本をつなぐ懸け橋として活動を行っています。そのきっかけは団体を支援していただいている一般財団法人麗澤海外開発協会（RODA：ローダ）※の木下廣太郎常務理事のご紹介によるもので、渡航時にお世話になっているカウンターパートの方のサポートもあり、ネパールと日本の学生が密接な活動を行っています」（田口）

※一般財団法人麗澤海外開発協会：開発途上国において文化・経済の発展に協力するため、国際協力活動を通して、世界の平和、人類の安心と幸福の増進に寄与することを目的として、主にネパール・タイ・ラオス・カンボジアにおいて援助活動を行っている。

カトマンズを拠点に活動を続けるBe a Bridge!。日本の学校教育では当たり前に行っている「清掃活動」をネパールにも浸透させることが子どもたちの心身の健康づくりへとつながり、平和と平等の精神を育てることにもつながると考えています。現地ではゴミの分別はされず、そのまま適当にゴミを捨てることが当たり前。そのため、前回の滞在時にはゴミを分別するためのゴミ箱を作りました。するとそれを見た現地の方から、日本の清掃システム導入の要望がありました。日本では学校の始業前や終業後に児童・生徒たち自身で掃除・整頓をするのは習慣になっていますが、ネパールでは自分たちの教室を自らの手で掃除することはありません。自分たちで使った場所や学校を自分たちの手で掃除することで、衛生面だけでなく、教育的な意味でも意識の向上につながることに気がついてほしいと思っています。」（田口）

「ネパールにはいまだにカースト制度が根強く残っています。掃除をする人＝身分の低い人という感覚が現状です。その意識を変えることができるのかと不安でしたが、実際に活動を行ってみると子どもたちは目を輝かせて参加してくれました。たとえば、学校周辺のゴミ拾いでは子どもたちがゲーム感覚で、誰が一番たくさんゴミを拾えるかを競ってくれたのです。その姿にどれだけ勇気をもらったか…。私たちが行っている活動はほんの些細なものかもしれませんが、日本の文化や習慣がネパールに暮らす人々の意識に少しでも変化を与え、これからのネパールの良い影響として役立つことを願うとともに、このような活動を行えていることを誇りに感じています」（藤内）

「私たちの活動で大切にしていることは、決して情報や知識を押しつけるのではなく、共に行動をすること。子どもたちと一緒になって何かをする、また一緒になって日本の文化を体験したり、知ってもらうことが重要だと考えています。私たちがまだ〝学生〟だからこそできることがたくさんあると思います。その思いは子どもたちのモチベーションの高さからも感じることができ、私たちが多少なりとも社会貢献できていることを実感しています」（田口）

遠く離れたネパールの地で子どもたちと清掃活動を行いながら活動を続けるBe a Bridge!のメンバー。そんな活動に励む彼女たちの姿は、子どもたちだけでなく、保護者や地元の人々を巻き込んだ大きなムーブメントとして広がりを見せ始めていることは間違いありません。

同じ団体に所属する二人の関係は先輩と後輩を超えた「強い絆」で結ばれている

Be a Bridge!で活動を共にする二人は、麗澤大学の先輩と後輩という関係以上に強いつながりを持ち、同じ目標に向かって歩み続けています。国際交流というフィールドで結びついた絆は深く、そして強いものです。

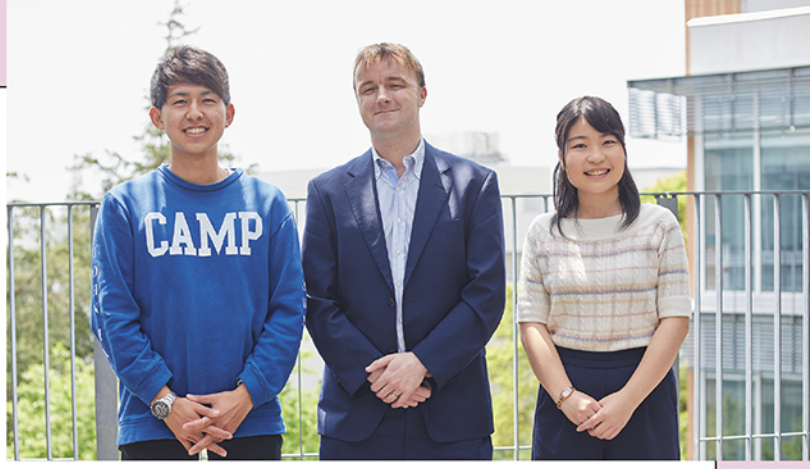
「Be a Bridge!ではサブリーダーを任されていましたが、今は海外でのインターンシップのため休学中なので、後輩の藤内さんにバトンタッチしました。彼女はミーティングの時にも司会進行役として会議をまとめる力を発揮してくれますし、学年代表としても頑張っているのが頼もしいですね」（田口）

「この前も田口さんとお話をしたのですが、あっという間に3時間以上（！）先輩というだけでなく同じ活動をする仲間であり、同志。人間としてリスペクトしています。田口さんは経験も豊富で柔軟な考え方を持っている先輩。いつも参考にさせていただいています。自分が悩んだり困ったりすることがあれば、絶対に良いアドバイスをしてくれる心の拠り所のような存在です（笑）」（藤内）

「ミーティングで行き詰まった時や考えがまとまらない時に、最初に私が声をかけるのが藤内さん。プロセスを組み立てるのが上手で、この状況ならば何が必要なのか、何を優先するべきなのかを適切に考えてくれます。そして、彼女と会話をすることで自分の熱量が上がってくるのです。人をやる気にさせるエネルギッシュさは、彼女ならではの魅力だと思います」（田口）

先輩、後輩の枠を超え、国際交流を通じて「仲間」として響き合っている二人。大学生活の中で一緒に夢中になれるものを見つけた彼女らの絆は、大学生活をより濃厚に過ごす、大きなエネルギーになっているようです。

＼Check!／
後編はWEBで
ご覧いただけます。



Interview

平野 友美 外国語学部　外国語学科　英語コミュニケーション専攻（2020年3月卒業）

千葉県出身、千葉県立鎌ヶ谷高等学校卒業。3〜10歳の時に中国・広州や香港に在住していた経験から英語や中国語など外国語への興味が強く、語学力を磨ける環境を求めて麗澤大学へ入学する。大学2年次から模擬国連団体の活動に参加し、3年次にはサブリーダー、4年次ではリーダーとして9期の麗大チームを牽引。他にもミクロネシア連邦で環境教育活動を行うJapanesia（ジャパネシア：ジャパン×ミクロネシア）自主企画ゼミナール※にも参加している。

中村 憲孝 外国語学部　外国語学科　英語・リベラルアーツ専攻

埼玉県さいたま市出身、さいたま市立浦和南高等学校卒業。専門学校に通いながら警察官を目指したが受験に失敗。これを機に、英語教員への道を目指して麗澤大学に入学。2年次から模擬国連団体の活動に従事するほか、Japanesiaにも参加している。

Richard Walker 外国語学部　外国語学科　講師

2019年度から模擬国連の担当教員に就任。英国出身、アストン大学（英国）TESOL（英語教授法）修士課程修了。アジアに関する研究を約25年間続けている。2013年から麗澤大学外国語学部の講師を務めている。

※自身の学びたいテーマに基づき、学生が自ら指導を受ける教員を選び、何をどのように学習していくかについて、該当教員の助言を受けながら決定し、学習計画を立て、その計画に従って学習を進めていく学生イニシアティブの科目。

前編 目指す先は世界で活躍する日本人 世界中の大学生が各国を代表して参加する模擬国連団体の活動

国連の模擬会議で通用する英語力や人間力を鍛える

麗澤大学では、学部を問わず1年次から、「PBL（Project Based Learning：課題発見解決型学習）」（以下、PBL）という、課題解決を目指したフィールドワークを推奨しており、学生たちは日頃の授業に加えて、意欲的に学外活動にも励んでいます。

中でも活発な活動を続けるPBLのひとつが、麗澤模擬国連団体の活動です。模擬国連団体とは、参加者が一国の大使・代表となって様々な国際問題について考える、大学単位で参加するサークル活動のこと。日頃の活動を披露する場が、毎年、アメリカの主要都市で開催される「全米模擬国連大会」。麗澤大学は、2011年から毎年11月にワシントンD.C.で開催される全米模擬国連大会に連続出場しています。アメリカを中心に世界中から70を超える大学が参加し、国連を模擬する学生会議の場で麗大生が奮闘。その成果は3年連続受賞の快挙。しかも2018年は、3つの賞を受賞する偉業を達成しました。

2019年度からは第9期として活動がスタート。もちろん使用言語は英語です。秋の大会に向けて、団体メンバーは毎週1度必ず集まり、様々な国際問題を英語で深掘りしながら情報をインプットし、かつ議論のためにアウトプットする力を高める日々を過ごしています。

ハードに見られる活動ですが、年々参加希望者が増加中。9期の総勢は過去最多の35名を超えました。麗澤大学は語学に定評があり、海外からの留学生も数多く通うだけあって、日常の学生生活でも国際色溢れる雰囲気を自然と味わえる環境です。日頃の授業やサークルなどとは別に国際経験を養う活動に直に触れ合い、真剣勝負の場で自らを鍛えたいという意欲的な学生たちを中心に、刺激に満ちたPBLとして展開中です。

磨くのは英語力だけではない。だからこそ「やりがい」がある

毎年恒例の全米模擬国連大会は、アジア圏からの参加は極めて少ないため、戦う相手のほとんどが英語のネイティブ。ハードルの高さは覚悟の上です。だからこそ、今回インタビューした学生二人の話を参考にしてください。二人とも最初から英語が堪能だったわけではないのです。

「幼い頃に海外在住経験があったこともあり、語学、特に英語に対する興味・関心が

高く、実践的に英語を学べる環境を求めていました。英語は得意科目のつもりでしたが、入学当初はまだまだでした。授業がない長期休暇中も、忙しいけれどやりがいに溢れるこの活動を通じて実践力を身につけました。」（平野）

「すごく得意というわけではありませんでしたが、元々英語に興味がありました。授業以外でも自分を磨ける環境に身を置きたくて、模擬国連団体の活動に惹かれました。英語をツールとして、政治や経済、歴史などを国際的な視野で考え学べる環境はとても刺激的ですし、自分へ投資してこれからの未来へつなげたいです」（中村）

2019年度からは、新たにリチャード先生が顧問に就任。先生は「意欲的な学生たちばかりで、頼もしい！」と太鼓判を押します。

「毎週の活動では、学生たちがそれぞれ調査してきた情報の共有や、テーマに基づくプレゼンテーションを行います。毎回の活動がとても濃厚です。私はファシリテーターとして、学生たち側から浮かびづらいアイデアを投げかけたり、議論が行き詰った時などに、きっかけを与える役割に徹しています。毎週の活動以外にも、さらにグループ別に異なるテーマについて話し合ったり調査したりと、たくさんの時間をかけて活動をしています。この前もリーダーの平野さんとの打ち合わせがありましたが、あっという間に数時間（笑）。これらを厭わない積み重ねの先に、必ず一人ひとりの成長があると確信しています」（リチャード先生）

現地で実際に感じた大きな挫折。挫折が〝今〟の原動力！

毎年秋に開催される全米模擬国連大会に出席できるのは8名ですが、それ以外のメンバーもサポートメンバーとして大会の準備に勤しみ、文化祭など他の舞台でも中心となって活動内容を披露します。実は平野さんは2年前、中村さんは1年前、それぞれ大学2年次に代表8名の一人に選ばれ、この大会に出席。そこで二人は大きな挫折を味わうのです。

「ずっと英語を勉強してきた自負はあったので、〝それなりにはできるはず〟と自信を持って臨みましたが、会議が始まる前から周りの雰囲気に圧倒されて…。会議でのネイティブの対話スピードが速すぎて、ついていけない。何を話しているのか、全然わからない。3日間の会議の場で自分の実力のなさを実感して、ものすごくショックを受けました。毎日のようにネイティブの先生と会話していたのに、こんなにもできないものなのかと痛感。もし次回チャンスがあるなら、絶対聴き取れるようにする！堂々と議論を戦わせる！と、この時強く決意を固めました。苦い経験ですが、忘れられない貴重な経験でもあります」（平野）

「今の僕を支えるのが、当時の悔しい気持ちなんです。現地で何もできなくて本当に悔しかった。でも悔しさをネガティブには捉えていません。こんなに悔しいと思えたのは今まで必死に頑張ってきたから。大会に参加したい仲間がたくさんいたにもかかわらず役に立てなかった悔しさを〝次こそ挽回したい〟という前向きな気持ちに変えて、今の自分自身の原動力にしています」（中村）

二人が異口同音に伝えたのが、初参加だからこそ受けた現地での衝撃。「悔しくて涙を流した」と口を揃えた二人が、「来年に向けた大きなモチベーション」へとつなぐ意識改革（気づき）こそ、この活動の真の醍醐味だとも言えます。

＼Check!／
後編はWEBで
ご覧いただけます。

Interview

梅津 健志先生

2017～2019年に酒井根東小学校校長を務め、2019年4月から千葉県教育庁教育振興部学習指導課に勤務。東京都出身。小中学校は新潟・岡山・青森、高校は北海道と日本各地で学ぶ。専門は国語科と情報教育。野田、流山、柏の小学校に勤務した後、柏市教育委員会で図書館活用教育、学力向上プロジェクトを手掛けた。趣味は気軽に楽しめる百名山に登ることと温泉でのんびり過ごすこと。

池田 将太 外国語学部　外国語学科　英語コミュニケーション専攻

高校時代は野球に専念、気合と根性に自信あり。苦手だった英語は気合と根性、先輩の猛特訓により克服。Japanesia（ジャパネシア：ジャパン × ミクロネシア）自主企画ゼミナール※の学生代表も務める。

※自身の学びたいテーマに基づき、学生が自ら指導を受ける教員を選び、何をどのように学習していくかについて、該当教員の助言を受けながら決定し、学習計画を立て、その計画に従って進めていく学生イニシアティブの科目。

實川 仁美 外国語学部　外国語学科　英語・リベラルアーツ専攻

世界各国から 70 を超える大学が参加し、国連を模擬する学生会議「模擬国連」に参加。ワシントンD.C.で開催された 2018 年全米模擬国連大会にも代表として出場。「世界を良くしたい、人のためになることをしたい」気持ちを原動力に幅広く活動する。本記事で紹介している酒井根東小学校で英語を教える英語教育支援チームのリーダーを務める。

前編 私たち、週3回、小学校で英語の先生をしています！ ～子どもたちの笑顔の先にあるもの～

麗澤大学の学生が小学校の英語の先生に!? 朝の授業をレポート！

今回は、麗澤大学の学生が地域の小学校で英語を教える自主企画ゼミナールをご紹介します。お話を伺ったのは、提携先の酒井根東小学校前校長の梅津健志先生とリーダーの實川仁美さん、池田将太さんです。いったいどんな活動なのでしょうか？　まずは授業の様子をのぞいてみましょう！

朝8時25分。酒井根東小学校の5・6年生の各クラスに学生が2名ずつ入り、英語のモジュール学習（10～15分間の短時間学習）が始まります。「Good morning everyone! How are you?」という学生のあいさつに、「I'm fine!」「I'm sleepy」などと、元気いっぱいに答える小学生たち。今日の授業は、3日後に控えた麗澤大学の留学生との交流会に向けた準備です。

児童はそれぞれ、当日発表する「My best memory」をテーマに英文と絵の創作に取り組みます。先生を務める学生は手分けして児童一人ひとりの様子を見て回り、困っている児童には「一緒に考えよう！」と声をかけ、早くできた児童には、手持ち無沙汰にならないよう「読み方わかる？」と質問をするなど、クラス全体に目を配りながら授業を進めていきます。学生に声をかけられると、児童たちはニコニコと嬉しそうにするのがとても印象的でした。あっという間に15分が経ち、学生は授業のまとめに入ります。「では最後に、ワンポイント。自分のことを伝えるときは、『My best memory is ～』から始めますね。相手に訊く時はどうなりますか？『What is your best memory?』となります。これは覚えて帰りましょう！では今日はこれでおしまいです、See you!」。15分が一瞬のように感じるほど、イキイキとした時間が流れていました。さて、ここからは担任の先生にバトンタッチ。先生の顔をしていた学生たちはすっかり学生の顔に戻り、今度は自分自身の学習のため大学へと急ぎます。

「英語で地域貢献したい！」が活動のきっかけに

この自主企画ゼミナールでは、酒井根東小学校の5・6年生を対象とした英語のモジュール学習を週3回行っています。現メンバーは13名。教員を目指す学生、好きな英語を活かした活動をしたい学生、子ども好きな学生――参加の動機は様々です。活動のきっかけは、大学の地元でもある柏

市から与えられた課題に学生が取り組む「麗澤・地域連携実習」でした。池田さん、實川さんをはじめとする学生たちは、柏市の国際交流をテーマに調査を進めるうちに「自分たちが学んでいる英語で地域に貢献したい」という想いがふくらみ、市役所や柏市国際交流協会にアプローチ。そこで、酒井根東小学校を紹介していただいたそうです。なぜ、小学校だったのでしょうか？

「2020年から小学5・6年生の英語が必修になるなど、小学校の英語教育が本格化される中で、私たちの専門である英語が役に立つのではないかと思いました。梅津校長先生には当初、英語のイベントを提案したのですが『地域貢献をするのであれば、一度限りではなく、継続的な活動にすべきでは』とご教示いただき、本当の意味での地域貢献を目指して、週3回、継続的に授業を持たせていただくことになりました」（池田）

「麗澤大学の皆さんにお願いしようと決めた理由は、何といっても、熱意。それに、英語を専門的に学ぶ学生の皆さんの協力があれば、児童たちの英語力のさらなる向上にもつながります。さらにいえば、麗澤大学には留学生も多く、児童が留学生の皆さんと交流する機会を持つこともできます。実際、普段のモジュール学習には留学生にも入っていただいておりますし、交流会も開催するなど、児童には貴重な経験となっています」（梅津先生）

ゴールは英語を話せることではなく、英語をツールとして活かすこと

「英語はこれからの時代、ますます欠かせないスキルとなるでしょう。小学生のうちから慣れ親しんでおくことは、とても大切だと思います。ただ、気をつけたいのは、子どもたちが『英語を上手に話せること』をゴールと設定してしまうこと。英語はツールに過ぎません。子どもたちには、『英語を使って何をするのか』を何よりも大事にしてほしいと思います。その点においても、たとえば、池田さんや實川さんがミクロネシアで環境活動をするために英語を学んでいるように、麗澤大学の学生は、自分がやりたいことに英語をしっかり活かしていて素晴らしいですね。その姿も、子どもたちの良いお手本になるはずです」（梅津先生）

梅津先生はさらに、麗澤大学の学生の印象をこんな風にお話してくださいました。

「皆さん真面目で責任感が強く、社会に貢献したいという気持ちが強いですね。これまで100回以上授業を行ってもらいましたが、学生都合で授業ができなかったことが一度もありません。これは素晴らしいことですね」（梅津先生）

学生たちは、どのように活動を運営しているのでしょうか？

「モジュール授業開始前には、その日のメンバーの参加状況を確認し、体調不良などで急な欠員が出た場合にも、他のメンバーが対応できるようにしています。クラスは基本的には担当制ですが、週1回のミーティングで各クラスの進捗状況などを情報共有し、メンバー全員が、自分の担当以外のクラスも把握して対応できるようにしています」（池田）

この活動は当初、学生有志によるボランティア活動としてスタートしましたが、現在は授業の一環である自主企画ゼミナールとして認められ、担当教員の町惠理子先生、アドバイザーのアンドリュー・マクノートン先生のご指導のもと、活動を続けています。

「自主企画ゼミナールにすることで学生が参加しやすくなり、現メンバーが卒業した後も、次代に受け継いでいける体制となりました。梅津先生にご教示いただいた通り、継続することで次代に良いものを受け継いでいき、本当の意味での地域貢献活動に育てていきたいと思っています」（池田）

＼Check!／
後編はWEBでご覧いただけます。

小規模にこだわる。
国際性にこだわる。

麗澤大学
Reitaku University

もっと、麗澤について知りたい人は…

REITAKU JOURNAL
https://www.reitaku-u.ac.jp/journal/